

大**中**PRIDE



大津町立大津中学校
生徒指導通信12号

令和5年10月16日(月)
文責：岡村 康平

価値のある10円玉

今週は、昔の新聞のコラムコーナーからの抜粋です。2つの話を紹介します。

2005年、オルセン監督率いるデンマークのサッカーチームが、香港で国際親善試合をしました。イランとの試合が始まり、前半終了間際に観客の一人が、応援の笛をピーッと吹いてしまいます。すると、イランの選手は、それを審判が吹いた前半終了を告げる笛と勘違いし、目の前に来たボールを手で拾い上げてしまったのです。

その瞬間、反則となりペナルティーキックが宣告されました。デンマークのチームが得点できる大きなチャンスがやってきたのです。オルセン監督はボールを蹴ろうとする主将を呼び、耳打ちしました。主将はニッコリ笑って、ボールの元に戻りました。

ボールをセットした主将は何と、ゴールとは反対方向にボールを蹴ったのです。結局、その後デンマークチームは後半に1点を取られ負けてしまいました。試合後、オルセン監督は責められました。「ほぼ確実に点を取れるチャンスをどうしてみすみす逃してしまったのか！」と…。

オルセン監督は、こう答えます。「あの選手の反則は意図的なものではなく、単なる勘違いだった。そんな人の弱みにつけ込むようなサッカーを、私は選手にやらせたくないし、デンマークの子どもたちに見せたくない。正々堂々と闘うことの方がもっと大切だ。」と…。その言葉を聞いた記者団は、オルセン監督に拍手を送ったそうです。

仙台のある牧師さんが、教会の横に寄宿舍を建てられ、知的障がいのある子どもたちを中学まで預かれていたそうです。中学を卒業する時に、ある試験が行われました。それは「500円、100円、50円、10円、5円、1円の硬貨をバラバラに置き、価値がある順番に左から並べていく」という試験でした。

中学を卒業した子どもたちは、色んな所に訓練に行きます。バスや電車に乗り、お昼ご飯も一人で食べなければいけません。そのため「お金の価値判断ができるかどうか」を見極める試験だったそうです。

「ようこちゃん」という一人の女の子が、中学を卒業する年齢になりました。ようこちゃんのお母さんは早くに亡くなり、お父さんも遠くに働きに出ていました。

試験当日、ようこちゃんの前に硬貨が並べられます。しかし、何度やっても、ようこちゃんが一番左に10円を持っていくのです。他の硬貨は、すべて順番通りに並べられるのに、10円だけはどうしても一番左に持ってくる。みんなが「この子は、まだお金の価値判断ができない」と考えました。

しかし、その時、一人の先生がハッと気づきました。ようこちゃんは、遠くにいて、なかなか会うことができないお父さんに、1日が終わる時間に必ず電話をしていたそうです。たどたどしい言葉で「お父さん、今日も1日無事に終わったよ。お父さんは大丈夫？」と言います。すると、電話の向こうで、お父さんが「お前も大丈夫か？」と言ってくれます。そんなやりとりが毎日交わされていたそうです。

先ほどの先生が言いました。「うちは※赤電話だわ…」と。赤電話だから10円玉しか使えなかったのです…。ようこちゃんにとっては、お父さんの声を聞くことができる10円が一番価値のあるお金だったのです。唯一、お父さんの声を聞くことができるお金だったから…。

人間の価値というものも、色々な見方ができると思います。そのことが分ると、「自分の人生は、人と比べることができないくらい大切なものなんだ」と考えられるようになると思います。ようこちゃんにとって、どのお金より一番価値があった10円玉…。私は教師として、何を一番価値としているのだろうか…。この話から自分を見つめ直すことができました。

あなたは、自分の人生の大切さに気づいていますか…。

※赤電話…主に店頭などに設置されていた電話の通称。また一般に、公衆電話。かつて、電電公社・NTTが設置した委託公衆電話が赤色だったことからの名。

